

佛敎研究

第五卷 第一號

佛敎中密敎思想輸入の時期と其動機

松本文三郎

印度に於ける密語密敎の思想の吠陀に始まつたことは言ふ迄もない。而して此等の思想は俗間長く傳唱せられ、佛時代にあつても盛に行はれたものであるが、原始佛敎では寧ろ之を排斥し、佛敎中に輸入せられなかつたことも疑なき事實である。で彼長阿含梵動經(別譯六十二見經)にも、或は餘の沙門婆羅門あり、他の信施を食み、遮道の法を行ひ、邪命自から活き、鬼神を召喚し、或は復驅遣し、種々厭禱し、無數の方道をもて人を恐熱せしめ、又人の爲め安胎出衣し、亦能く人を呪し驢馬となし、亦能く聾盲瘡腫ならしめ、或は病を呪し、或は善呪或は惡呪を誦し、乃至水火を呪し鬼呪をなし、其他刹利呪、象呪、支節呪、安宅符呪、火燒鼠嚙の解呪をなすが如き、悉く以て邪命となし、男女の吉凶好醜を相し、死生の書、夢書を讀み、手相を占ふ等と共に「沙門摺曇には此の

如きことなし」と斷じてある。即ち厭禱讀呪の佛並びに佛大弟子の之を行せられなかつたことは明かである。而して現時傳はつて居る密部の經典なるものは、主として唐の開元年代善無畏（開元四年）や金剛智、不空（同八年）の前後して支那に渡來翻譯した所であることも人の能く知る如くである。此等の人々は當時印度に於ける最新の經典を將來したものと推察せらるゝから、印度に於て此等密部の經典の盛に顯はれたのは、恐らく西曆紀元後六七百年前後のことであつたらうかと思はれる。密部の經典は此時を以て最も盛に顯はれたとしても、此時始めて密敎思想が佛敎に輸入せられた譯ではなく、其輸入は少くとも之よりも更らに數百年以前に溯り得るものと信ずる。全然神呪祈禱の説を排斥した原始佛敎から、斯かる密部の佛敎經典が成立するに至るまでには、可なり長い年月の豫備時代がなくてはならぬ筈である。始め全然之を排斥して居たものも、時代思想の感化によつて次第に密敎的氣分に侵漸せられ、遂には之を以て佛敎の根本思想と何等撞著を感せざるに至つて、始めて此に此等經典が顯はるゝやうになつたものと見なければならぬ。然らざれば佛敎者は何人も之を信すべき筈はないからである。

現に我邦に於いても密敎の始めて傳はつたのは、平安朝の初、弘法大師からのことであるが、傳記によれば弘法大師も入唐以前勸操から虚空藏求聞持法を受け、未だ雜染せずして修練に従つたといひ、（元享釋書卷一）役小角も葛木山に入り巖居三十餘歲、孔雀明王呪を持し、鬼神を驅逐したと

もいはれ、(同卷十五)又泰澄も念呪神變を行じたと傳へる、是故に虎關師錄も泰澄密乘に感悟すともいふ。小角や泰澄の傳記は頗る神怪の事實に富み、必らずしも悉く信すべからざるのであるが、弘法が入唐以前既に求聞持法を持したといふのは恐らく眞であらう。即ち密教の渡來以前密部の經典の我邦に傳はつたことは疑を容れない事實のやうである。

之と同様のことは尙ほ著しく支那に於ても見られ得るのである。前にも一言した如く支那に於ける密教の傳來は、唐の開元年間、即ち西曆七百年代の初からであるが、之に先つこと既に四百年、東晋永嘉中に支那に來た帛尸密多羅は「善持呪術、所向皆驗、初江東末有呪法、密譯出孔雀王經、明諸神呪」(高僧傳卷一)といはれる。即ち西曆三百年代の初、既に密呪の西域佛敎者によつて誦せられたことは疑ない。弘法以前我邦に傳はつた密呪等も亦此類のものであつたのであらう。のみならず密多羅と殆んど同時支那に來た佛圖澄も、傳によれば「善誦神呪、能使役鬼物、以麻油雜燕脂塗掌、千里外事皆徹見掌中、如對面寫」といひ、又石勒の佛敎の效驗を尋ねた時には、至道遠しといへども近事を以て證となすべしといひ、即ち「取應器盛水燒香呪之、須臾生青蓮花、光色曜目」勒之によつて信服したともあり、又襄國の城の壘水の源が乾燥した時には、澄、水源の地に至り「坐繩牀、燒安息香、呪願數百言、如此三日、水法然微流」したともあり、又石虎の子の斌の暴かに病み死するや、彼亦「取楊枝呪之須臾能起、有頃平復」したとも稱せられ、其他旱拔の時には雨を祈

り大降雨を得たとか、弟子の死に垂んとするを見ては、焼香呪願として之を救護したとか、斯かる靈驗譚は尠からず傳へられて居る(高僧傳卷九)、此等の靈驗譚も今必らずしも悉く信すべからざるものではあるが、佛圖澄が密呪に長じて居たことは疑ないことであらうと思ふ。而して彼も密多羅と同じく帛氏である所を以て見れば、或は共に龜茲の産であつたかも知れぬ。三百年の初、西域龜茲に既に斯かる法が傳はつて居たとすれば、印度に於ては尙ほ少くとも數十百年以前佛敎者の行ふ所であつたことも容易に推測し得らるゝ。尙ほ年代は明かに判らぬが、西域の人耆域なるものも、人の兩脚彎屈して起行く能はざるものに對し、淨水一杯楊柳一枝を取り、楊柳を以て水を拂ひ、舉手呪願すること三度、而る後手を以て病者の兩膝を搦し、歩行故の如くならしめたとか、樹木の枯れんとするものに對しても之に向つて呪し、再び之をして榮茂ならしめ、又將さに死せんとするものに向つては病器を其腹上に著し、白布を以て之を覆ひ、呪願數千言して活を得せしめたとかいひ(高僧傳卷九)、又西域の人涉公なるものは符堅の建元十二年長安に來り、能く祕呪を以て神龍を下し、早く雨を降したといふやうなこともある(同卷十)、其他之に類することは必らずしも少くない。何れも果して皆事實であるか否は判らぬが、密敎渡來以前密呪密敎的思想の諸種の方面からして次第に支那に來つたことは動かすべからざる事實であらうと思ふ。是れに由つて觀ても印度に於て密敎經典の盛に顯はれた六七百年以前、此等の思想の次第に佛敎中に輸入せられたことを知り

得るのである。若し然りとすれば此等密教思想は果して何時頃からして佛教中に輸入せられたか、又如何なる必要からして輸入せらるゝやうになつたか。此問題は密教學者には固よりのこと、一般佛教史の研究者に取つても多少の興味あることであらうと思ふ。

二

大乘經典には諸種の部類があり、其教義亦必ずしも一樣でない、隨つて其製作の年代にも前後の別あることはいふ迄もない。が其何れの部類にあつても、密呪の説の顯はれざるは殆んどないといつても差支ない。即ち密呪陀羅尼等、密教的思想の佛教に輸入せられたのは遅くも大乘教勃興の時、若くは之を去ること餘り遠くはなかつたらうと推察せらるゝ。今其主なるものに就き一二の例を擧げて見よう。

先づ法華經には陀羅尼品なる一章が設けられ、此には藥王、勇施の諸菩薩から、毗沙門、持國の二天、乃至十羅刹女が法師を守護する爲めの陀羅尼呪を説き、若し此呪を誦する時は如何なる魔波旬も其便を得ないといふ。勿論此陀羅尼品なるものは後世増益せられたものではあるが、陀羅尼なる語は他にも屢、顯はれて居る。法華經中の古い部分と思はるゝ分別功德品にも、「得聞陀羅尼門」といひ、又百千萬億無量旋陀羅尼等ともいひ、一々陀羅尼の文は擧げてないが、法華經製作の時には勿

論佛敎者の間には諸種の陀羅尼の唱えられて居たことは疑ない。

大乘涅槃經(無織譯卷一)に於ても欲界の魔波旬が「若有善男子善女人、爲供養故、爲怖畏故、爲誑他故、爲財利故、爲隨他故、受是大乘、或眞或僞、我等爾時當爲是人除滅怖畏、說如是呪」といひ、此に呪文を擧げ、更らに其呪は能く諸の失心者、怖畏者、說法者、不斷正法者の外道を伏する爲め、己身を護するが爲め、大乘を讚するが爲め、是の如きの呪を説く、若し能く之を持せば惡象の怖もなく、曠野空澤嶮處にも怖畏を生せず、水火獅子虎狼盜賊王難もない、此呪を持せば我之を護し、我當さに至誠に其勢力を益さしむべしともいつてある。此等の言は大體法顯譯にも顯はれて居る所であるから、本よりして存したものに相違なからう。尙ほ卷四十にも阿難が魔に惱亂せられた時、佛は一呪を説かれ、此呪を誦すれば「能轉女身、自識宿命、若受五事、一者梵行、二者斷肉、三者斷酒、四者斷辛、五者樂在寂靜、受五事已、至心信受、讀誦書寫是陀羅尼、當知是人即得超越七十七億弊惡之身」といはれ、文殊師利此呪を受け、魔中に至つて之を誦すれば、魔王果して菩提心を起して阿難を放つたとある。之によつて見ても大乘涅槃製作の時には密呪の説に佛敎中に入來り、佛敎と何等矛盾を感ぜざるまでになつて居たことゝ信せられるのである。

更らに華嚴經に至つては其最後の入法界品には、金剛頂經や大日經等と略相同じく、所謂四十二字觀門なるものを説いてある。で同經(八十華嚴卷七十六、四十華嚴卷三十一)には徧友善財に告げ

て、「我得菩薩解脫、名善知衆藝、我恒唱持此之字母、唱阿字時入般若波羅蜜門、名以菩薩威力入無差別境界」等といひ、此に四十二字に就き一々之を説き、終りに此字母を唱ふる時、此四十二般若波羅蜜門を首となし、無量無數般若波羅蜜門に入るとなし、之を善知衆藝、菩薩解脫を知るとなし、智通達彼岸に到るといひ、鬼魅怨憎惡星癩怪等種々の諸疾威能く之を救ひ痊癒を得せしめ、金玉貝珠一切寶藏出生の處、大小都城宮殿苑園一切人居る所皆能く攝護すともいふ。此入法界品なるものは華嚴經中に於ても最も新しい部分であらうと思はれるが、此四十二字を觀すれば何れも般若波羅蜜門とも稱する所を以て見ても、恐らくこれは般若經の説に本づき成れるものであらう。般若諸經の中陀羅尼に就いては處々に説いてあるが、四十二字門に關しても叙述頗る詳細である。同經（大品般若卷五）には先づ「菩薩摩訶薩摩訶衍所謂字等語等諸字入門」なりといひ、それから前の如く一々字の密義を説き了つて「諸字無礙無名亦不滅、亦不可説不可示不可見不可書」といひ、又是諸字門印、阿字印、若聞若受若誦若讀若持若爲他說、如是知當得二十功德」となし、此に識念を強くすとか、慚愧を得とか、二十種の功德を列擧し、更らに終りに「是陀羅尼門阿字門等名菩薩摩訶薩摩訶衍」と述べてある。四十二字觀門のことは恐らくこれが最初のものであらう。勿論此等諸經に説く所の一々字の密義並びに其字數に至つては多少の相違を認むるが、併し其根本原理は秋毫も異ならぬ。

智度論(卷四十八)には更らに此經の文を解して次の如くいふ、

問曰若略說則五百陀羅尼門、若廣說則無量陀羅尼門、今何以說是字等陀羅尼、名爲諸陀羅尼門。

答曰先說一大者、則知餘者皆說、此是諸陀羅尼初門、說初餘亦說。復次諸陀羅尼法皆從分別字語

生、四十二字是一切字根本、因字有語、因語有名、因名有義、菩薩若聞字因字乃至能了其義、是

字初阿後荼、中有四十、得是字陀羅尼。

一々字義の由つて來る所は今必らずしも說かぬが、斯く四十二字陀羅尼門の菩薩大乘の法たる所には智度論説く所によつて略之を理解することが出來やう。

般若部類の經典は大乘諸經の中にあつても比較的早く顯はれたものと一般に推測せられて居る、而して此最初の大乗經典中、斯く陀羅尼の説が詳細に述べられ、且つ略說すれば五百陀羅尼門、廣說すれば無量陀羅尼門とある所を以て見ても、大乘勃興の時には佛敎者の間、諸種の陀羅尼が唱えられ、又其功德の大なるものと信せられたことは殆んど疑を容れない。斯く大乘敎徒が陀羅尼密呪の説を信じたことは明かであるとしても、果して大乘敎徒に至つて始めて之を佛敎中に輸入したものが否に就いては、尙ほ多少の疑問がないでもない。

部執異論の疏にすれば、佛滅三百年に於て一切有部の末派化地部より分裂した法藏部は五藏を立てた、五藏とは即ち經律論の普通所謂三藏と呪藏と菩薩藏であつたといふ。若し果して此傳説が多量なりとも事實であつたとすれば諸種の密呪なるものも、既に此時代からして佛教中に輸入同化せられたと考へらるゝのであるが、異部宗輪論杯に擧げた本宗同義の中には何等之を徴すべきものもないのであるから、今容易に信ずることは出来ない。

が前にも一言した如く禁呪の法は吠陀時代以來印度に行はれ、佛教の起つてからも數百年來の信仰は容易に消え去らず、佛教者の間にも佛の之を禁止せられたに關はらず、諸種の術が行はれたものゝやうである。殊に始めは娑羅門教の信者であつたが後何等かの機會によつて佛門に入來つたものもあり、此等の間には私かに密呪の法を行じて居たものもないではなかつたらしく思はれる。戒本の中にも此等諸種の方法が處々に散見する。勿論佛は之を禁せられて居るが、斯く處々に顯はるゝのは、即ち一面から見れば佛教者にして之を行ふものゝ少くなかつたことを證明するものといはれやう。現に十誦律(卷四十四)には迦羅比丘尼なるものが他の比丘尼と鬪諍し、自から法呪泥犁呪を作り、若し汝我が是事を謗せば汝をして四念處四正勤乃至七覺八道を得ざらしめ、汝をして世地獄畜生餓鬼に墮せしめんといつたこともある。而して律本に記す所によれば當時行はれた呪法には斯く人の得道を妨ぐるものもあれば、盜の爲めにするものもあり、殺人の爲めのものもあれば、

又人の病を醫するものもあり、何れも佛教者によつて行はれたらしい、而して其方法も亦色々ある。例へば盜の場合には、比丘牀より起ち衣服を整へ、曼荼羅を作り、彼四方に於て謁地羅木を釘し、五色の線を以て之を圍繫し、火鑪内に於て諸の雜木を燃し、口に禁呪を誦するものといふ（有部毘耶卷三）。人を殺さんとする場合の呪法は次の如き奇怪至極のものである。

若苾芻故心欲殺女男半擇迦等、便於黑月十四日、詣屍林所、覓新死屍乃至蟻子未傷捐者、便以黃土揩拭、香水洗屍、以新疊一双遍覆身體、以酥塗足、誦呪呪之、千時死屍頻申欲起、安在兩輪車上、以二銅鈴繫於頸下、以兩刃刀置於手中、其屍即起、便問呪師曰、汝欲令我殺害誰耶、呪師報曰、汝頗識彼某甲女男半擇迦不、答曰我識、報曰汝可往彼斷其命根（有部毘奈耶卷七）。

が殺さんとする所の人、若し禪定に入り、或は滅盡定に入り、或は慈心三昧に入り、若くは大力呪師あつて護念救解すれば殺すを得ざるものとなす。或又鐵車鐵人を作り前と同様に呪するもあり、又牛糞を地に塗り、中に酒食を設け、火を燃し、尋で水中に著け、心に念じ口に呪を誦し、火の水中に滅するが如く某の命も亦滅すべしといふもあり、或は前と同様にして殺さんとする人の形像を畫き、尋で還之を撥無し、呪を誦し、此像の滅する如く彼亦滅すべしといふもあり、或は又針を以て衣の角を刺し、尋で之を拔出し、呪を念じて是針の如く彼の命も隨つて出でよといふもあり、諸種の方法があつたやうである。（十誦律卷二參照）

此等の盜呪、殺呪乃至法呪、泥犁呪等と稱するものゝ如きは、呪法の如何に關はらず、其事自身既に非法なるが故に佛の之を禁せられたるは當然である。併し有部毗奈耶(卷四十二)には又次の如き話が載つて居る。舍衛城に一婆羅門あり、三寶中に於て心信敬なかつた。彼時に重病に罹り、醫人皆是惡病療治すべからずといつて之を顧みなかつたので、彼は唯空しく死を待つのみであつた。爾時鄔陀夷彼家に至り、化して醫人となりいふ、汝憂ふること勿れ、我善く之を醫せんと、即ち呪術良藥の力不思議にして須臾の間にして平復を得せしめた。病者大に喜び遂に之が爲め佛敎に歸依したといふ。思ふに斯の如きは佛敎者といへども一時の方便として古より之を行ふたものではなからうか、彼佛圖澄が、石勒の佛敎の靈驗を問ふに當つて、燒香呪願、青蓮花を生せしめたといふが如き、今日に於ても印度の呪術師が行ふ手品を臨機應用したと殆んど同じである。而して此等は呪術とはいふものゝ善意のものであり、佛敎化導の方便であり、何等の害を生ずるものでもないのであるから、毗奈耶の中にも必ずしも之を禁じないのである。

以上略説する所によつて之を見れば、佛は始め呪法の善と惡とを問はず一切之を以て邪命となし、外道の行ずる所、佛敎者の敢て爲すべきにあらずとなしたに係はらず、後世佛弟子の間には數百千年來の信仰の牢として抜くべからざるものあり、殊に婆羅門敎よりして佛門に入來つたものゝ如き自から此等呪術を行じたものも少くなかつたらしい。而して他人に危害を與ふる惡意的呪術は、勿

論佛教本來の精神からして之を嚴禁したが、其善意的のもの、即ち他の危害を去り、幸福を與ふるもの、若くは佛教化導の方便として之を行するもの、如きは、之を默認したのみならず、寧ろ之を賞讃するに至つたものではなからうかと思ふ。斯くして大乘教の起る以前にあつては、佛教者も實際上之を行じたことが尠くなかつたにも關はらず、佛説には現に之を禁じてある所から、單に私に之を行するといふ程度に止まり、表面上公々然として之を是認し、若くは佛教々義と之を融會せしむるまでには至らなかつたことゝ信する。が一たび大乘教の起るに及んでや始めて之を公然經典の上に顯はし、又之を以て佛教々義と融會せしむるに至つたのである。是れが抑も般若經に或は五百陀羅尼といひ、或は無量陀羅尼といひ、陀羅尼の説が盛に顯はれ來つた所以であらう。若し大乘興起以前の佛教者の間に全然なかつたものならば、一時に斯かる多數の陀羅尼の製作若くは輸入せらるゝ筈もなからうと思ふし、又小乘律本の中斯く諸處に禁呪のことが載せらるべき理由もないことと思はれる。勿論密教の組織は當時未だ出來なかつたが、密教思想の由來する所は經典の上からは般若諸經であり、更らに溯つては暗黙の裡、佛教時代若くは之を去ること餘り遠からざる時代にまで辿ることの出來得るものではなからうかと思ふ。

佛滅後の佛弟子が時としては暗黙の裡私かに居て居た呪法が、大乘教の起るに及んで公然之を經典の上に著はすに至つたといふものゝ、其間單に公私の別のみならず、また其意義に於ても多少の相違のあることを認めなければならぬ。大乘教興起以前の佛教徒が私かに行じた所は律本等に述ぶる所によつて之を見れば、法呪、泥犂呪、殺呪、盜呪乃至毒蛇呪等と稱するが如く、從來印度人の常に行ふ所と何等の異なるなく、佛教其物とは何等關係を有せざる呪法に過ぎなかつたのである。而して優陀夷の如く之を善用するものにあつても、單に一時權宜の方便に過ぎず、其目的からして自然に生じ來つた手段ではなかつた。宛も彼の佛圖澄が佛教の靈驗を聞かれて青蓮華を生せしめたといふと同じく、青蓮華と佛法の靈驗とは本來何等本質的關係のないことである。併し若し一度び之を經典の上に著はさんとするに至つては、斯かる無關係の呪法であつてはならぬ、何等か其間に一層親密なる連絡の貫通するものがなくてはならぬ筈である。で今大乘經典に顯はるゝ陀羅尼なるものを見るに、中には佛自身の説かれたものもないではないが、其多くは佛教擁護者の口から發した所である。例之へば法華經の如きは、藥王、勇施等の菩薩や、毘沙門、持國の諸天や、十羅刹女の説く所であり、涅槃經の如きも魔王波旬等の述ぶる所である。而して此等の陀羅尼は未だ佛教々義と本質的關係を有するものではないが、少くとも外面的關係を有つて居る、即ち此等は何にも佛教若くは其護持者たる説法者を守護する爲のものである、是故に涅槃經にも「爲伏外道故、護

己身故、護正法故、護大乘故、說如是呪」ともいふ。佛自身の説かれたものであつても亦之と同じである。乃ち此時に於ける陀羅尼は最早や單に一時的臨機の方便ではなくして、佛法外護の重要な關係を有するに至つたのである。

更らに四十二字觀門の如きにあつては、啻に外面的關係を有するに止まらず、佛教と本質的關係を保ち、佛教其物と融會して秋毫離るべからざるものともなつた。で般若經にも「菩薩摩訶薩摩訶衍、所謂字等語等諸字入門」といひ、涅槃經にも一々字を唱ふる時には般若波羅蜜門に入るといひ、又「我得菩薩解脫、名善知衆藝、我恒唱持此之字母」ともいふ。此等の字を念する時は、本不生乃至一切法第一義諦を諦得することが出来るのである。此點に於ては宛も淨土の諸經が至心に佛名を唱ふれば、即ち淨土に往生することを得といふと殆んど異ならない。即ち此にあつては唱名其ことが佛教であり、佛教の本質であると同じく、彼にあつては四十二字觀門其物が佛教の内容であつたのである、だから又之を以て菩薩摩訶衍の法ともなしたのである。斯くして佛教と本來無關係の密教思想は外面的にも内面的にも最早や佛教と離るべからざる密接なる關係を有するに至つた。密教の組織は未だ出來なかつたが、後世密教の組織せらるゝ基礎は、既に此に成立したものといはなければならぬ。

尙ほ大乘教以前の呪は前にも屢々述べた如く佛教と本質的關係はなかつたが、其善意のものは、

毒蛇呪とか醫呪の如く、其本人を守護し諸種の災害危難を除かしむるを以て目的としたものである。此點に於ては後の大乘諸經に於ける佛法守護の呪と其性質を同じくする。而して密語の陀羅尼門は、婆羅門教に唵を念じて三昧に入ると同じく、元と是れ禪定三昧に入る方法であるから、三昧に入る方便として輸入せられたものであらう。此點に於ても彼念佛念神が始め三昧に入る最も容易なる方法と見做されたと同じである。

之を要するに佛教中に於て密教が其形をなしたのは、紀元後六七百年の頃であつたらうと思はるるが、其基礎をなしたのは大乘勃興の初期からであり、而して未だ佛教的とはならなかつたが、僧團内呪法の行はれたのは佛滅後久しからず、若くは佛時代からも既に多少はあつたことかとも思はれる。而して大乘教の起るに及び呪法が佛教と融合せらるに至つた主なる動機は、(一)佛法若くは其說法者の守護として、(二)禪定三昧に入る方法として、あつたらしい。彼の唐代に於ける密部經典の翻譯以前、早くも東流したといふ孔雀明王呪とか乃至求聞持法と稱する如きは、何れも要するに佛教者守護の呪である。此等の呪が三百年前後既に成立して居たのは前述する所から見ても當然のことであつて、少しも怪しむに足らぬのである。

最後に一言したいのは陀羅尼と曼特羅との關係である。陀羅尼 Dhāraṇī は即ち總持であり、心に憶念して忘れざることである。佛法の精髓を常に憶念して忘れざらしむるに當つては、必らずしも

一字一語とは限らぬが、成るべく之を簡單なる語に約し能く之をして心に把住せしめ得るやうにしなければならぬ。此點からいへば四十二字の如きは最も陀羅尼の本義に合したものである。彼の佛法又は説法者守護の呪の如きは寧ろ曼特羅と稱すべきではなからうか。曼特羅 *Mantra* (即ち神呪) とは吠陀の祈禱の詩から魔除の呪文の類を意義するのである。守護の呪と陀羅尼とが本來全く其性質を異にするのはいふ迄もない。併し何故か佛敎では普通之を總じて陀羅尼と稱して、其間何等差別を設けないやうである。或は華嚴經に四十二字觀門を説き、之を以て一切智通達、彼岸に到るとなすのみならず、又以て衆生の衆病鬼魅怨憎乃至惡星變怪を救ひ、一切寶藏郷邑都城を攝護し、世間所有技藝も該鍊せざるなしともいふが如く、陀羅尼は同時に曼特羅ともなる所から、何れも通じて之を陀羅尼と稱するに至つたのかも知れぬ。(完)